

ペプシノゲン法

東邦大学教授・内科第1講座 三 木 一 正 編集

東北大学医学部長

久 道 茂

1998年4月、厚生省の「がん検診の有効性評価に関する調査研究事業」研究班(総括委員長:久道茂)の報告書が公表された。わが国の老人保健法の保健事業の中に取り入れられている5種目のがん検診について、内外の学術雑誌や報告書を精査し、がん死亡率減少効果を示す確かな科学的根拠があるかどうか、その証拠の質の程度はいかほどか、などについて調査した。最終的に、わが国のがん検診についての“勧告”まで行った。

その中で、胃がん検診については、“逐年のX線検査を用いた胃がん検診受診を勧奨する証拠がかなりある。ただし、検査の限界に関する十分な説明を事前に行うべきである”とまとめた。これまでの胃がん検診の有効性を評価する種々の研究、例えば、症例対照研究、時系列研究、地域相関研究、非無作為化コホート研究、生存率比較研究など、RCT(無作為比較対照試験)以外の多くの研究で、いずれも胃がん検診は胃がん死亡率を減少させる証拠がかなりあるという判断をしたのであ

る。

しかし、現行の胃がん検診には限界があることも確かである。関係者なら承知のことだが、間接胃X線撮影法は、粘膜変化を伴う胃後壁陥凹性病変や小彎線付近の場合は小病変でも抜群の診断能を発揮するが、前壁病変、小隆起性病変、平坦型早期胃がんの場合は、どうしても限界がある。これは、集団を対象とした検診の効率化のため、直接胃X線撮影法で行っている圧迫法を採用していないこと、前壁病変に対する撮影方法と枚数に制限があるからである。

このような状況が続いていた中で、10年ほど前から新しい胃がんのスクリーニング法の開発に没頭していた東邦大学医学部の三木一正教授は、ペプシノゲン法を考案し、その基礎的実験、臨床での応用、アメリカや中国、UICCの研究機関などとの共同研究、日本消化器集団検診学会附置研究会の発足、そして厚生省がん研究助成金による研究班の設置まで、ほとんど一人で努力され、忍耐強く、着実に成果を上げてこら

れたのである。その間、内外の消化器病研究者は、次第に関心を示すようになり、こぞってペプシノゲン法に関する研究を行った。疫学研究、診断能の臨床研究、そして集団を対象とした胃がん検診の実際へと研究が進んできた。

本書は、近年注目されている胃がん検診におけるペプシノゲン法に焦点をあて、その疫学、基礎的・臨床的研究、実際の集検での成績など全体を網羅したものである。執筆者も総勢100名近くにのぼり、現在わが国における最新最高の報告書と言える。しかも、編者はペプシノゲン法の長所だけでなく、限界にも触れている論文を公平に編集している。今後、本法の更なる研究の発展のためには、本書の役割は極めて大きなものになると信じる。いい著書である。関係者は必読すべきもの、とぜひ推薦したい。

● B5 頁288 図93 写真16
カラー写真11 表120 1998
定価(本体3,000円+税) ¥400

—医学書院 刊(☎03-3817-5657)